

小説のなかには多くの人が住んでいる。

実際は文字を読んでいるだけだが、読書とはそこで暮らす人たちと同じ世界を共有する行為に他ならない。自他ともに認めるビブリオマニアである本田奈那子にとって、生身の人間と小説の登場人物との間に差はなかった。

むしろ高校に進学してからは架空の人物と接するほうが長くなっている。毎年新たに配置される同輩はみんなモブであり、ただの書割りでしかない。心躍る冒険を共にする戦友のほうがよほどリアルに感じられる。だから教室で大勢のなかを一人で過ごしても孤独を感じたりはしない。

本さえあれば生きていける。

そう思っていた。

だが高校二年になって奈那子は、文字ではなく一人のクラスメイトを目で追うようになった。

名を悠太郎というらしい。

本人から聞いたわけではない。みんながそう呼んでいるだけだ。

葉田という苗字のほうが印象に残った。

葉は本に挟むものであって苗字に使うものではない。奈那子も葉を髪留めにしてはいるが、とにかく珍しい名字だなという感想を持った。それは、つまらない課題図書をむりやり読んで書いた感想文みたいに消えるはずだった。

だが悠太郎はいつまで経っても奈那子の意識から離れない。本を読んでもなぜか目に入る。声がするとつい手がとまる。そのたびに登場人物が文字に戻ってしまいちっとも頭に入らない。

こんなことは初めてだ。

物語に集中できず、奈那子は苛立ちをおぼえた。ばれないように本を盾にし、私の居場所を奪うなと悠太郎を睨みつける。いつか文句を言ってやろうと企んでいた。だが、そうするうちに、奈那子の感情は予想外の方向に展開した。

悠太郎は明るく朗らかだし、遊んでばかりいるように見えて勉強も運動もそつなくこなす。少々だらしない格好をしてはいるが、完璧すぎないところが良い。どんなに強いヒーローでもひとつくらいは欠点があるものだ。

退屈な出だしと思っていたら読み進めるうちにどんどん引きこまれていく。いつしか悠太郎から目が離せなくなり、本を読むことができなくなっていた。

私は彼に恋をしている。

人を好きになるなんて初めての経験だが、知識だけは豊富にあるのでこれが恋だということは理解できる。だがここからどうすればいいのかは見当もつかない。

困った。

声をかけようにもどう話しかけたものか。ハウツー本を読んだがまったく参考にならない。いろいろ書かれてはいるが、すでに知っていることばかりだ。新たに判明したことは、

知識だけでは何も変わらない事実と、わかっていても変わらない己の臆病さだけだった。

恋愛小説のヒロインも相談にはのってくれない。頼りがいがないと頬を膨らませて返事さえしてくれない。物語から出られないのだから当然である。

同様に、悠太郎の目に奈那子は映ってさえいないだろう。

彼はときおりスマホを見つめている。彼女と連絡でも取りあっているのだろうか。その手中でどんな物語が紡がれているのだろうか。在りもしない筋書きが浮かんでは消えていく。それだけでもう気がそぞろになり、読書も勉強も手につかない。同じ教室にいただけで胸が締めつけられ、息ができなかった。

このまま一人の読者として遠巻きに見つめるしかないのか。

どうすれば彼のヒロインになれるだろう。どうすれば――

悠太郎と目が合った。

気づけば向こうもこちらを見ている。

しまった、視線を送りすぎた。

奈那子は慌てて顔を伏せた。本を立てて身を隠す。

悠太郎がこちらに近づいてきた。

奈那子はさらに肩を丸める。

どうしよう。ぜったい変に思われている。何か理由を考えないと。

だが血の気が引いて頭が真っ白になっている。

悠太郎はもう目前に迫っている。

いっそ逃げてしまいたい、体もいうことをきいてくれない。

悠太郎がくちを開いた。

奈那子はかたく目を閉じる。

そこで廊下から大きな声がした。他のクラスの男子だ。野球をしようと呼びかけている。

悠太郎も誘われた。男子と奈那子の間で視線を往復させていたが、けっきょく連れていかれてしまった。

その背中を見送り、奈那子は息をはくと同時にひどく落胆した。

せっかくのチャンスだったのに、なぜ隠れるようなマネを。

やはり私には恋なんて無理なのだ。

読了した本のように、わだかまる想いを本棚の奥に押しこめた。

※

授業が終わると奈那子は図書室に向かった。

図書室にはすでに数人の生徒がいたが、みんな漫画やライトノベルを読んでいる。文芸コーナーはいつもどおり閑散としていた。

異常がないかざっと見渡してから奈那子は腕章をつける。一人だけの図書委員を一年か

ら務めており、放課後をここで過ごすのが日課だ。

図書室なら誰にも邪魔されずに本が読める。

みんなもっと読みに来てほしいとも思うが、静かな状況が好ましい。

雑務をこなし、受付に呼び鈴を置くとカウンターから抜け出す。懐から鍵をだし、それを奥にある扉に挿す。扉をくぐると古びた本の匂いがした。淡い明かりのなかを無数の塵が舞っている。掃除が行き届いていないので慣れないとむせ返る。

それでも奈那子の足取りは軽い。

この図書準備室には陳列しきれしていない蔵書が眠っている。

一般生徒が立ち入ることのない場所で書架の群れに囲まれていると、不思議の国に迷い込んだ気分になれる。いつか懐中時計を持つ紳士なうさぎが迎えに来るのではないか。ネバーランドやバベルの頂上だって目指せるかもしれない。神話の神様と謁見だってできるだろうし、タコ型の宇宙人と握手だってできるかも。奈那子にとってここは、未知と遭遇するための秘密の空間だった。

今日もまた新たな冒険を求めて本の群れに飛び込む。

おびたしい本のなかから一冊選び、奥付に貼られた封筒から貸出カードを抜き取って裏返す。名前が書き込まれているとカードを戻して本を片付ける。気になる本を取り出しでは次々に確認していく。別の本を手にとると今度は何も書かれていない。寄贈されて何年も経つのに未だに誰にも読まれていないのだ。

ここにはそんな小説が数多く埋もれている。

真新しいカードを見つけると金鉱脈を発見した鉱夫のようにはしゃいだ。図書委員になってこの鉱脈を発見して以来、未開の小説を発掘し、自分の名前を最初に刻むことを何よりの楽しみとしていた。

今日は三冊も掘り当てた。なかなかの収穫といえる。この調子ならまだ出てきそうだが、一度にたくさん見つけると明日の楽しみが減る。奈那子はあと一冊だけと決め、発掘し終えた本を受付まで運ぶとふたたび準備室へと向かった。入口から奥までぐるりと一周し、最後の一冊を慎重に探る。さんざん迷ったが、高いところにある一冊に目を留めた。背伸びをしながら手をのばす。

なんとか背表紙に指先が届いたところで別の手が触れた。

「あ、ごめんなさい」

先生が来たのかと思い、奈那子は頭をさげた。だが――

「あれ？ 君は……本田さんだよな？」

そこにいたのは栗田悠太郎だった。

※

どうしてここに栗田君が？

奈那子は目を見開き、無言の問いを投げかけた。

「そこ、開いていたから」悠太郎は入口を指し示した。

見れば扉が半開きになっている。

鍵を閉め忘れていたのだ。

「こんな部屋があったんだ。ぜんぜん知らなかったよ。あ、もしかしてここ、立入禁止だったりするのかな？」

奈那子は首を横に振って答えた。とつぜんの邂逅にうまく声が出せない。何か話さないと不愛想なやつだと思われる。だが気持ちとは裏腹に舌は空回りするばかりだ。

「だいじょうぶ、誰にも言わないよ」

奈那子を慮ったのか、悠太郎はそう言って指をくちに当てた。

それから興味深そうに書架を見渡す。

「たくさんあるね。これぜんぶ本田さんが管理してるの？」

「と、図書委員だから……」腕章をお守りのように握りしめ、なんとか答える。「あの、どうして私の名前を？」

「どうしてって」悠太郎は目を丸めた。それから軽く苦笑しつつ「クラスメイトじゃん」と言った。

たしかにそうなのだが、奈那子には奇跡的な答えだった。

同じ世界を共有していても認識されなければ存在しないに等しい。だが名前が挙がるということは、悠太郎のなかの物語にもちゃんと奈那子は存在しているということだ。これが本日最大の収穫だった。

「でも、そっか。ちゃんと話すの初めてだったかもね。俺、栞田っていうんだけど、ほら本田さんのふたつ前の席に座ってる」

「うん」知っている。いつも見ているから——とはくちが裂けても言えないので、顔を赤らめつつこくこくと頷く。

「ちょうど探してたんだ、本田さんのこと。いまって時間ある？ 作業の途中だったら手伝うけど」

「ううん。だいじょうぶ、もう片づいたから。あの、私に何か用？」

「うーん……用ってほどでもないんだけどさ」悠太郎は照れくさそうに頬をかいた。「前からちょっと気になってたんだよね、本田さんのこと。だけど教室ではいつも本読んでるし、なんとなく話しかけられなくて。今日もチャンス逃しちゃったし。だけど放課後に図書室にいるって聞いて、ここなら丁度いいかなって」

これはどういうつもりだろう。

ふたりきりのシチュエーションに向こうからアプローチしてくるなんて。

もしかしたら、もしかして。

これはやっぱりそうなのだろうか。

奈那子の期待はいやでも膨らむ。

悠太郎が一步前に歩み寄った。正面から顔を合わせるのは初めてだ。奈那子よりずっと背が高い。だが大きな瞳にはまだ幼さが残っている。

奈那子は射竦められ、倒れそうになるのを必死にこらえた。彼の大きな手で抱きとめられでもしたら心臓発作を起こしかねない。そうしたらもう二度とこんな僥倖は訪れないだろう。

はやく物語の続きを聞かせてほしい。

前のめりになりながら奈那子は次の言葉を待った。

そして悠太郎が慎重にくちを開く。

「よかったらさ、本田さんのお薦めを教えてほしいんだけど」

「……お薦め？」

「そう、小説の。どうかな？」

「あ、ああ。それはもちろん。よろこんで……」

笑顔で答えつつ奈那子は心のなかで慟哭した。

一流のストーリーテラーは、良くも悪くも読者の予想を裏切るものと再認識した。

※

小説を読んでいるとお薦めを聞かれることがある。

感想やレビューをまとめているサイトがあるのも知っている。

人はなぜ他人の評価を知りたがるのか？

奈那子は常々疑問に思っており、持論を立てていた。

結論を言うと、小説が伝わりにくいコンテンツだからだ。

映像や音楽ならばたれ流しでも届く。マンガなら絵を眺めるだけでもだいたい理解できる。これらは視覚や聴覚に直感的かつ受身でも情報が入ってくるためだ。

だが小説は違う。

受け手が能動的に読む意志がなければどんな名作でも絶対に伝わらない。読み終えなければ真の評価をくださすこともできない。とちゅうで飽きるようならその程度といえなくもないが……一作を読了するにはどうしても長い時間を要する。長編になるほど時間的コストは嵩むし、ハズレを引きたくない心理が働く。

そこで他人の評価を参考にしようというわけだ。読まなくても良し悪しが推測できるし、忙しい現代人には合理的といえる。

だが奈那子はこの風潮が気に入らない。あらすじを検索だけして読んだフリをするのはいかななものか。さらにネタバレしていないと読めないという読者までいるのだからにわかには信じがたい。

なぜここまでお薦めされたがるのか？

奈那子がおもしろいと思って薦めても、悠太郎が同じように感じる保証はない。いや、

百人が読めば百通りの感想がある。

小説は、読者のなかで育まれるものだ。

どんなに作者が良い種を蒔いても、土壌や気候が違えば結果は異なる。大輪を咲かせることもあれば芽が出ずに枯れることだってあるだろう。

なかには奇書と呼ばれるものや学術的で難解な小説もある。わかる人にだけ伝わればいいという前提で書かれた暗号みたいな作品もある。これらを読み解きたければ、受け手にも一定の読解力や感受性・教養などが求められる。

エンタメ小説でも変わらない。最低限の語学力は必要になる。我々日本人は当たり前のように日本語を解し、読み書きしているが、文字は送り手と受け手の間で共通認識があって初めて成り立つ。

これは会話に置き換えればわかりやすい。違いは、リアルタイムな言葉ではなく、過去に記された文字という点だけだ。

だから、もし小説を楽しみたいなら、時間をかけて文字を追い、五感をフルに使って感情移入し、その世界の舞台を、音を、匂いを想像し、視点となる人物に寄り添っていくしかない。そうしてようやく文字はただ記号からキャラクターへと変身し、物語のなかを案内してくれる。

人は現実には無いモノを在ると置き換えることができる。

無いモノとはつまり、物語のことだ。

物語は現実には存在しているわけではない。

作者が連ねた文字を読者が頭のなかで展開・再構築した幻だ。一人ひとり感想が違って当然である。

同じ人でさえ、環境や気分で左右されることもある。読み直してみたら驚くほどおもしろかったという経験はないだろうか？ いわんや他人のレビューなんて当てにできるはずがない。感想は共有できても感動は不可能だ。たとえわかり合えた気がしても、それはやはり錯覚にすぎない。

人はみんな一人で生まれてくるように。

本来、読書は一人で行う個人的な行為だったはずだ。

自分で読んで、自分で確かめる。悪戦苦闘の末に新たな知見と出会ってこそ、感動できるのではないか。他人にお薦めされないと読めないのなら読む必要なんてない。

そう奈那子は考えている。だが――

「それでも私にお薦めされたいのであれば！」

刹那の賢者モードから脱すると奈那子はそう言い残し、くるりとスカートをはためかせた。バタバタと奥の棚へと駆けていったかと思うと、そのちいさな両手いっぱい本を抱えて戻ってきた。

悠太郎にぶつかる寸前でブレーキをかけ、勢いそのままに顔をあげる。メガネの奥で不敵に笑っている。教室では見せない表情だ。

奈那子は本の束を差し出し、高らかに宣言する。

「私はこの『百鬼夜行シリーズ』をお薦めしよう！」

「うお、何それ！？」

奈那子の豹変ぶりに気圧されたのではなく、本の分厚さに面食らったのだろう。悠太郎が「辞書？」とつぶやいたのを奈那子は聞き逃さなかった。

「辞書ではないし、鈍器でもない。百鬼夜行シリーズは 1996 年に講談社から刊行された京極夏彦のデビュー作である『姑獲鳥の夏』から始まる長編ミステリーよ」

さらに『魍魎の匣』・『狂骨の夢』・『鉄鼠の檻』・『絡新婦の理』・『塗仏の宴～宴の支度～』・『塗仏の宴～宴の始末～』・『陰摩羅鬼の瑕』、そして『邪魅の雫』の九作で構成されているシリーズだ。次に『鶴の礎』が続く予定だが、未だ出版には至っていない。

「ミステリーっていうと殺人が起きて探偵がトリックや謎を解き明かすんだよね？」

「必ず殺人が起きるわけじゃないけれど……おおむねその認識であっているわ。だけど本作はそれだけじゃない。これが刊行される以前の、従来のミステリーのお約束にはなかった、謎を解く手法が斬新なの」

「その手法というのは？」

「ネタバレになるから言えない。そこは自分でたしかめないと」

とはいえ、自信を持って薦められる作品だが『姑獲鳥の夏』以外はすべて千ページを超える大長編だ。一朝一夕で読める代物ではない。レンガ本と揶揄されるくらい一作のボリュームが多いので、日常的に読書をしている人でも腰が引ける。

それでも奈那子はこれを薦めたかった。

今でこそ自他ともに認めるビブリオマニアであり、小説であればなんでも読む奈那子だが、みんなにもそうなってほしいと期待をしているわけではない。

だが、一生のうちに読める数などたかが知れている。

ならばできるだけ早いうちに傑作に触れてほしい。

そこで得られた感動が読書の質を大きく変える。

無いモノは無い。

在るモノは在る。

とは限らない。

奈那子もこのシリーズによって、これまで在った世界観や固定観念が無くなり、ビブリオマニアとして本格的に覚醒するきっかけとなった。

本書のおもしろさは尋常ではない。

常軌を逸した可読性と豊富な知識、そして謎が謎を呼ぶ展開に一度読みはじめたらページをめくる手が止まらなかった。夜通し読み耽ってしまい、連日睡眠不足に陥ったものだ。

この愛すべきクラスメイトがなぜ小説に興味を持ったのかは知らないが、出来るなら同じ感動や興奮を味わってもらいたい。同じように驚き、同じように読書を好きになってもらいたい。

たとえそれが淡い恋心のような幻想だとしても。

願うくらいは許されるはずだ。

そう思いつつも奈那子は、胸に秘めた想いが裏切られることを恐れて顔を伏せる。

悠太郎は、奈那子が観察するかぎりでは本を読まない。いきなりこんな大作を紹介しても引くだけだろう。奈那子はあきらめまじりでため息をついた。しかし——

「おお、さすが本田さん！」

悠太郎が歓声をあげ、喰い入るように本を見つめた。爛々とかがやく視線の先にあるのは件の妖怪たちだが、その延長線上には奈那子もいる。結果的に額がくつつくほど接近した。

「本田さん、これぜんぶ読んだんだ」悠太郎がさらに詰め寄る。

「う、うん……」

「俺もこういうの読んでみたかったんだ。本田さんのお薦めなら絶対に間違いないよね？」

もちろん、と太鼓判を押したいところだが、絶対なんて言われると自信がなくなる。どんな名作でも全員に受け入れられることはない。抱く感想は人それぞれだ。そこをどう説明しようか……。

だが考える暇もなく悠太郎の手がのびる。

「じゃあさっそく借りるね」

そう言って本といっしょに奈那子の両手を包みこんだ。

「あ……」

触れられた瞬間、呪文をかけられたように時間が止まる。そしてそれは、悠太郎が本を借りて去っていくとまた動き出した。

こうして悠太郎との逢瀬は無事に終えた。

思考がフリーズしている間に素っ頓狂な声をあげてしまったこと以外は。

※

翌日——

奈那子は一人教室の席で本を読んでいた。

それはいつものことだが、今日は景色がすこし違っている。ふたつ前の席に悠太郎の姿がない。いままで欠席したことなんてあったらどうか。すくなくとも奈那子の記憶にはない。

男子も連絡しているが不通のようだ。だが事故や病気なら先生から報せがあるだろう。おおかた彼女とどこかでサボっているのではないかなどと、ちょっとしたスキャンダルに湧いている。心配しているのではない。勝手にストーリーを作って楽しんでいるだけだ。大衆はいい加減なものである。

それは奈那子も同じか。

昨日の奇跡が今日も続くのではと期待していたため、よけいにいらぬ想像を巡らせてしまう。いやでも噂話に引きずられ、小説を読んでいてもまったく落ち着かない。現実にもいなくても、悠太郎はつねに奈那子のなかに存在しているのだ。

奈那子はページをめくる手をとめ、息をはいた。

あれから読んでくれただろうか。

ラブレターでも渡したような言種だが小説のことだ。

奈那子は同じくらいの気持ちで貸し出したが、だからといって読んでくれる保証はない。すこしは目を通したかもしれないが、すぐに飽きられても文句はいえない。

感想はその人だけのもの。

同じ反応を期待するほうが間違っている。

とっく十二時の鐘は鳴り終えて、魔法はすっかり解けている。時計は機械的に進み、お伽噺は現実にとって代わられる。ただ日常に戻るだけ。大人になるとはそういうことだと自分に言い聞かせ、本を閉じた。

だが、帰りのホームルームが終わり図書室へ向かおうと席を立ったとき、扉が慌ただしく開いた。先生が戻ってきたのかと思ったが現れたのは悠太郎だった。

「本田さんいる？」

教室に飛び込むや開口一番奈那子の名を呼ぶ。そしてビブリオマニアを目にすると、他のクラスメイトには目もくれず、一直線に向かってきた。

何事かとクラスじゅうがざわめいた。

「栞君……？」

奈那子も戸惑った。ずっと走ってきたのだろう、悠太郎は汗をかき、肩で息をしている。顔色もよくない。ただならぬ雰囲気だ。

悠太郎は顔をあげ、大きく息を吸った。そして身構える奈那子の前に本を掲げる。

「すげえ、すげえよ本田さん、この小説！ すっげえおもしろかった！」

破顔しながら悠太郎が手にしているのは『姑獲鳥の夏』だ。衆目を集めるなかでもまったく気にせず、饒舌にまくしたてる。

「帰ってからすぐに読み始めたんだけど、あんまりおもしろくてつい完徹しちゃったよ！」

「もしかして、いままでずっと読んでいたの？」

「うん、それでもけっきょく一作目しか読み終えれなかったけど……やっぱり一夜でぜんぶ読むのは無理だな！」

一睡もしていないようで眼の下にクマができていし、やけにテンションが高い。速く読む必要はないが、読んでくれているのならこれ以上の望みはない。

「って本田さん？ 聞してる？」

「心配しないで。ちゃんと聞いてるから。好きなだけ続けていいわよ」

興奮しながら感想を綴る悠太郎の声を BGM に、奈那子は本を開いて物語の世界へ入っていく。

「そう？ それじゃあ遠慮なく」

悠太郎もかまわず思いの丈をぶつけてくる。嗚呼――

読書はなんて孤独な作業なのだろう。

文字は幻で、いくら言葉を交わしてもわかり合えない。

しょせん無いモノは無いのか。

悠太郎の感想は「すげえ！」だとか「やべえ！」だとか、語彙力もなにもあったものではない。きっと彼が見た文字の世界は、奈那子のそれとは違うのだろう。

それでも。

私の好きな人が私の好きな本を好きだと言っている。

感動していることだけは伝わってくる。

無いモノが在るように錯覚できる。

たとえ幻だとしても、わかり合えた気になれるのはとても幸せだと思う。奈那子自身を好きになってくれたわけではないが、我が事のようにうれしい。だから、

「このシリーズぜんぶ読み終わったらさ、また本田さんのお薦めを教えてくれないかな？」という悠太郎のリクエストに応じ、奈那子は読みかけの物語に葉を挟む。そして教室では見せたことのないとびきりの笑顔を好きな人に向けて言った。

「次のお薦めは――」